

「ずるくないよ——」

突然「ぐわぁー」とけものの声がしたので、人間たちはびびりくりぎょうてん。

「逃げるー」

一目散に走りさって行きました。

「うう。いつもこうだ」

フッチのため息に、お母さんハイエナが言いました。

「仕方ないのよ。人間はハイエナのこともフッチのことも、よく知らないんだから」

森の仲間たちもフッチを、なぐさめてくれました。

「人間たちが、どう言おうと、フッチは、ぼくたちの仲間じゃないか」

タヌキのボンがやさしく背中をなでてくれます。

でもフッチは「よく知らないから」という理由で、人間たちから嫌われるのは、もうイヤでした。

「じゃあ知ってもらおうよ」

フッチは決心しました。

「人間たちが、ハイエナを好きになるような絵本を、自分でつくる」

フッチは一生懸命考えて、ハイエナが主人公のお話を自分で書きました。やさしいハイエナが、旅でつかれた白鳥を助けて、鳥の国へ連れて行ってもらう、というお話です。

次に、絵を描きました。シッポをふでの代わりにして、

花や木の実をつぶした絵の具で色を塗りました。

「人間のまちに行くなんて危ないわ」

と反対していたお母さんも、出来上がった絵本を見ると、最後は許してくれました。

お母さんは、イノシシばあさんが作ってくれた『絵本を作っている会社』のリストをフッチの手に持たせました。

「ここへ行って、『絵本にしてください』って言うんだよ」

そして、お母さんは、フッチをぎゅっと抱きしめました。苦しくなるくらい抱きしめられた後、ゆっくりお母さんが

はなれると、フッチのからだは、どこからみても「人間の少年」の姿になっていました。

「日が暮れたら、元の姿に戻ってしまうから気をつけて。

必ず、日暮れまでに帰ってくるんだよ」

フッチはドキドキしながら、山を下りました。歩いていくと、どんどん景色が変わっていきます。緑は減っていき、灰色の壁がふえていきました。

フッチが初めてみた「人間のまち」は高いビルが立ち並び、固そうなところでした。車が走り、交差し、あまりの

騒々しさに頭がくらくらします。

フッチは勇気を出して絵本をつくっているという「出版社」へ向かいました。

しかし、一つ目の会社は、ビルの受付で、とてもきれいな女の子が、